

命の選別につながることから、慎重な対応がおこなわれてきたNIP T（新型出生前検査）やPGT-A（着床前検査）をめぐり、大幅な規制緩和がおこなわれている。毎日新聞の千葉紀和氏は「命の選別ビジネスと繰り返される国家の罪—NIP T・PGT—A急拡大の真相」と題する「科学」四月号への寄稿のなかで、その背景にバイオテクノロジの発達により巨大市場と化していることがあることを指摘し、マスメディアが企業から発せられる情報を疑問もなく垂れ流す現状に強く警鐘を鳴らしている。

NIP Tは米国のバイオベンチャー・シーケノム社が二〇一一年に実用化した。わずかに大さじ一杯分の妊婦の血液から胎児の障害の有無を推定する技術だ。

PGTは体外受精した胚が細胞分裂する途中で一部を抜き出し、染色体や遺伝子を調べ、特定の疾患にかかわる変異のない胚だけを選別して出産をめざす技術で、そのうちPG

T-Aは染色体の本数の変化を調べ、重篤な遺伝性疾患を調べ、目的（PGT-M）とは区別されている。

指針無視する無認識 定のクリニック増

千葉氏は「両検査は技術的には異なるが、障害児が生まれる可能性を理由にした胎児および胚の選択的な中絶は廃棄に至る点で、共通する倫理問題が指摘されてきた。日本ではこうした懸念の一方で、晩婚化などに伴う検査ニーズの高まりや女性の自己決定権についても盛んに論じられるようになり、規制緩和の要因にもなっている」が、「両検査は巨大ビジネスと化し、議論の前提が成立していない」と指摘している。

アメリカの市場調査会社メディキエラスリサーチ社は世界全体のNIP T市場が二〇二七年に一三六億に達すると試算しており、他の調査会社も総じて二〇三〇年までには一兆円市場になるとの見通しを出して

「安心の捏造」で急拡大するビジネス

旧優生保護法と重なる「命の選別」

いる。市場規模は現状でも三〇〇〇億〇〇〇億円にのぼり、その主役は世界の名だたる遺伝子検査企業だ。アメリカのイルミナ社、ラフコ社、ナテラ社、中国のBGI社などが売上を競い、上位二〇社は海外企業が占めている。各社のリポートでは共通して、日本を含むアジア太平洋地域は市場が急進すると見通しており、年平均成長率の見通しは二〇〇%程度としているという。

出生前検査の大規模規制緩和めぐり 『科学』4月号

た。もっとも多かったのは美容外科だった。あるクリニックでは、妊婦一人人ほどをまとめて招き入れ、障害をもつて生まれてくる子どもが社会問題になっている」と切り出し、別の施設では「親のこともわからず、お母さんの時間は一切なくならず、」子は遠くの施設で暮らすことになる」と医師が説明していた。そして妊婦の不安をあまり、検査を選ばせているのだという。

と海外の遺伝子企業をつなぐ仲介企業の存在がある。代表的な一社は愛知県に本社を置くジャスタック上場のインテリア商社。主力事業だった輸入生地のカーテン販売が不調をきたすなかで、新たな収益源として目を付けたのがNIPTだった。若手起業家が始めた会社も仲介ビジネスで急成長しているという。そうした仲介業者の一つが全国の開業医に送ったダイレクトメールには「採血し

ける一方、シェア争いも激しさを増している。他社との差別化をはかるため、検査範囲を広げ、希少疾患のリスクもわかると売り込んでいる。しかし、その実態は極めて怪しい代物だということがわかる。今年元日にアメリカのニューヨーク・タイムズ紙は「染色体の微小欠失検査の陽性は八五%が誤判定」とスクープで報じた。二人人に一人しか発症しないブラダー・ウィリー症候群とアンジェルマン症候群の検査は「九三%が誤り」だった。しかし擬陽性で中絶した人もおり、著者は「六面体のサイコロを振るより低い中率を隠して高額検査を売りまくるのは『安心の捏造』と言うしかない」と指摘している。

う建前で決まった新たな基本方針は、医療機関の認定に厚生労働省が関与するというもの。無認定のクリニックを排除するために認定施設を増やすのは、「端的に言えば妊産婦の意向に沿った業界内での『金のなる木』の奪い合いに過ぎない」と指摘する。そもそも、子の障害の有無はわからないことの方が多く、「安心」を求める人々にとってNIPTでの「陰性」は気休めでしかなく、中途半端な国の「お墨付き」によって誤解に拍車をかけてはならないから。PGT-Aはより明白なビジネスとして展開されている。

さて、問題はそのNIPTの実態だ。日本では二〇一三年に日本医学会の認定施設限定という条件で解禁され、日本産科婦人科学会（日産婦）が厳しい認定指針を策定した。しかし、指針を無視して勝手に検査する無認定のクリニックがあらわれ始めた。著者が二〇一九年におこなった実態調査では、九割方は産科医が在籍せず、検査後の出産にも中絶にも責任をとらないことがわかった。

NIPTは二トリソミー（ダウン症候群）など三対の染色体の検査のみ。三染色体で価格は一五万〜二〇万円。さらに各染色体の微小欠失まで調べるメニューが用意されており、そのオプションメニューを追加すると五万円前後が上乗せされる。クリニック側は採血するだけで妊婦一人につき三万〜五万円の利益がある。そして、これらのクリニックなど

て頂くだけで、一採血あたり三万円の採血料をお支払いします」と「ドクターの負担はゼロです。月五〇件の場合、五〇件×三万円＝一五〇万円の売上が見込めます」など、どこまでも軽い言葉が続いていたという。

「女性のため」を看板にしてポロ儲け
そして遺伝子検査企業。ゲノム医療の時代を迎え、各社は急成長を続

ところが日本では「精度九九%」が独り歩きし続けており、大手紙や新興メディアも何の疑問もなくその情報を伝えている。そのことに著者は警鐘を鳴らす。NIPTについては、野放図に広がっている現状への対策が急務であるものの、対策とい

であることも。